第４回青森県生涯学習審議会会議録

日時	平成２９年１０月１２日（木）　１４：００～１６：００
場所	青森県総合社会教育センター４階　第二教材開発室
出席者	《 委 員 》敬称略　１４名　（欠席１名） 天内　不二子　上澤　司　奈良　陽子　岡　詩子　菊地　倫子 白戸　美也子　奥島　涼子　出崎　真里　柏谷　至　松本　大 住吉　治彦　増田　由美子　春藤　千秋　工藤　清子 （長岡　俊成） 《事例発表者》 久保田　圭祐（NPO 法人　あおもり若者プロジェクト クリエイト　理事長） 伊　藤　亮（青森市教育委員会文化・スポーツ振興課　主査） 渡　邉　エイイチロウ（A-Paradise コーディネーター） 《 事務局 》　４名 渡部　靖之　（生涯学習課長） 渡部　泰雄　（学校地域連携推進監） 佐々木　昌生（企画振興グループマネージャー）他１名 《 その他 》　２名 早野　英明　（学校教育課　課長代理） 小森　直樹　（総合学校教育センター　教育活動支援課長）
内容	１　開　会 ２　教育長挨拶 ３　案　件 （１）若者が中心となった地域づくり活動について （２）先進事例実地調査に係る調査項目について （３）今後のスケジュールについて ４　その他 ５　閉　会
配付資料	次第 青森県生涯学習審議会委員名簿 座席図 資料１　あおもり若者プロジェクト　クリエイトの取組について 資料２　A-Paradise の取組について 資料３　先進事例実地調査について 資料４　今後のスケジュールについて

会　議　の　内　容

（◆会長　◇委員　■事例発表者　○事務局）

案件（１）若者が中心となった地域づくり活動について

◆会長

この審議会も今回で４回目になり、折り返しということになるかと思う。

まず、前回の審議会では、県内の若者による取組に関しても情報を集めたいという話があったので、今日は三人の方に事例報告ということでお越しいただいた。

それでは県内の事例を紹介していただくことにしたい。

≪事例紹介≫

①　「あおもり若者プロジェクト　クリエイトの取組について」

■事例発表者①

私は出身が青森市、現在２４歳で、県立高校を卒業後、慶應義塾大学総合政策学部を卒業し、昨年の４月に同大学院政策メディア研究科の修士課程に進学し、２年生である。

私が高校２年生の時、クリエイトという団体を立ち上げた。今年で９年目を迎えた。

クリエイトは、どのような団体かというと、若者が主体となった地域づくり団体である。メインの事業として、クリエイトまち塾という取組を行っている。

クリエイトまち塾は、商店街を学校に見立てた取組である。商店街は学校であるので、クラスというものを作っている。今年は２３名の高校生を４つのクラスに分けている。学校として活動するので、それぞれのクラスに担任と副担任を付けている。担任は、商店街の店主である。そして、副担任が地元の大学生である。高校生６名と商店街店主が担任として１名、副担任として大学生１名の計８名のメンバーで、１年間まちづくりの活動を行っている。

従来のまちづくり活動と異なる点は、月に１回、まちづくりに関しての勉強会を行っている。月に１回の勉強会は、日々の活動で感じたことや学んだことを経験則から学びに変換する役目を持っている。そして、月１回の勉強会で学んだことを活動で実践するというサイクルを１年間行っていく取組となっている。

クリエイトまち塾を始めたきっかけは、私が高校時代、商店街のまちづくり活動ではいろいろな学びがあったのだが、それを後輩たちにも感じてほしいと思ったことである。まちづくり活動は、社会教育活動だと思っている。高校生主体の実践活動によって、考える力や創造力が身につき、商店街や学生たちとの交流を多く持つことができ、商店主から折に触れてフィードバックしてもらってアドバイスを受けられるという仕組みができている。

商店街という場所は、地域の資源が集まってくる場所だと考えている。それは、モノにしてもヒトにしても資源だと考えている。その商店街に集結している資源を、高校生が上手く活かしてまちづくりを行っている。

クリエイトの立ち上げの経緯は、私が高校２年生の時に、東北新幹線新青森駅の開業がきっかけとなった。青森には魅力がないと言われているけれども、魅力的な資源があるのに気付いていないだけではないのかと思い、青森の魅力を見つけて、ブラッシュアップして、それを発信するという活動を始めようと思った。まちづくり活動を通した教育をしていこうと、これまでの活動をステップアップできると思って、NPO 法人化してクリエイトまち塾という活動を始めたのである。

クリエイトまち塾のコンセプトとしては、商店街の役割を深めていくことだと考えている。それまで商売の場であったが、実は交流の場としても機能させていこうという考

えである。人と人との交流で学んでいくことが大事だと思っているので、商店街ではなくて商店主。クリエイトではなく参加している高校生。人と人との関係を深めようというのが、クリエイトまち塾の仕組みの中に備わっている。さらにいうと、活動体制の深化ということで、ボランティア活動を１年間をかけてプログラム化している。また、ボランティアではなくて、一つの社会教育活動であると定義づけをすることで、プログラムとしての形を整えることができた。

このまち塾を通じて、商店主と高校生は関係を深めていくことができるのだが、勉強するだけではなく、それをアウトプットすることで学びが深化する。

このまち塾の１年間のゴールは何かというと、翌年の３月に企画提案をしてもらうことである。今年は商店街が社会を変える方法を課題テーマに勉強してもらっている。このテーマについて、商店街の店主と高校生は１年間をかけて企画を考え、ブラッシュアップして、３月になるとクラスごとに発表するのである。それを審査員５名に審査してもらい、どのクラスがよかったかを発表してもらっている。その中で商店主と高校生は、最終発表まで一致団結して取り組んでもらい、関係を深めていってもらっている。

クリエイトまち塾は 2014 年に始めて今年で４年目になったが、2009 年の立ち上げから私たちが大事にしていることは、「三人称の提言より一人称のまちづくり」である。これは、立ち上げたときから私が感じていることで、商店街を活性化するためにはどうすればいいかを議論すると、つい商店街の組合がこういうことを行えばいいとか三人称の提言になってしまいがちなのだが、そうではなくて、我々若者ができることは、自分たちがどういうアクションを起こすのかということだと思っている。だから、クリエイトまち塾に参加する若者や、スタッフの若手社会人や大学生には、必ず一人称のまちづくりというものを念頭に置きながら活動している。

４年目になるまち塾を運営して、まち塾はいろいろな人によい影響を与えられているのではないかと感じている。一つは、若者自身である。まちづくりを通じて、参加している高校生が日常生活では得られにくい学びができるということである。高校時代は、なかなか地域に出向いていく機会が少ないと思うが、通り過ぎることはあっても、地域の人と話をする機会というのはあまりないと思う。まち塾で人とのつながりをつくることによって、キャリア教育のような職業観や、地域に対する愛着を深めることができると思っている。そして、地域の人たちに対しても何かよい影響を与えられていると感じている。それは、地域に愛着を持った若者が地元を巣立っていく、あるいは、地元に戻って来ることである。そのことが地域に対する貢献になると考えているし、若者たちは柔軟なアイディアや企画をもって実行することができる。そして、青森でクリエイトまち塾を経験した若者が活動していると、地域全体、商店街全体が元気になっていくことができる。

クリエイトまち塾は、一言で言うと、商店主や高校生のような多世代が学ぶまちづくりであると思っている。それが正に地域の未来、参加者本人の未来の少しだけ視野を広げられるのではないかと思って、活動を続けている。

◆会長

質問等は、全ての事例紹介が終わってからまとめて受けたい。

② 「A-Paradise の取組について」

■事例発表者②

私は A-Paradise の事務局を担当している青森市教育委員会文化スポーツ振興課の職員である。A-Paradise の担当は今年の６月からで、席は社会教育課にある。社会教育課では、青少年の健全育成を担当している。A-Paradise の他には、冬のアートイベントも担当している。

■事例発表者③

私は A-Paradise のコーディネーターをさせていただいている。A-Paradise のイベントは、今年で４回目になるが、第１回目は出演者として参加していた。普段は、自分で曲を書いて歌うというシンガーソングライターの活動をしている。２回目から A-Paradise のテーマソングを作らせていただいた。３回目は A-Paradise の主旨が変わったので、曲を新しく提供させていただいた。現在は、コーディネーターとして雑多のことを手伝わせていただいている。

■事例発表者②

A-Paradise は、例年だと９月中旬の秋ごろに開催している。今年は、日程的なものを考慮して、１１月１８日に昭和通りにあるブラックボックスという場所で開催する予定である。青森市とともに、アートで音楽のあるまちづくりを進めているあおもりアーツカウンシェルという団体があり、若い世代をメインに部会を設立して、企画運営を担っていただいている。誰もがもっと気軽にアートや音楽に親しめる環境づくりを目指して市が若い世代と一緒に進めているという取組である。

今年のポスターが今日出来上がった。今年は、「あおもりの街をアートと音楽で盛り上げろ。」をスローガンにしようと付け加えている。このポスターのデザインは、部会の中にボランティアとして参加している女性がデザインの仕事をしているので、無償で作成してもらったものである。

A-Paradise は、青森市が音楽とアートがある文化芸術のまちづくりを推進しようという方針を打ち出したところからスタートしている。この方針の中に位置づけられているものとして、これからの地域を担う若者が自らの力でまちづくりを考え、自由な発想で自分たちが魅力を感じられる地域文化、アートシーンを作り上げるという内容だったので、それを具現化するものとして A-Paradise というイベントを立ち上げようということになった。A-Paradise の企画運営は、若い人たちが実際に創り上げているのである。

このような経緯で、音楽やアートに興味のある若者やコーディネーターとしてアドバイスしてくれる人、地域でアート活動をしている大人の方に声をかけて、実行委員会が立ち上がった。まず、実行委員会を立ち上げてから時間をかけたことは、どういうことをやりたいのかを問いかけて、そこから皆さんの意見を出していただき、ブラッシュアップしていく過程で A-Paradise の輪郭が出来上がっていった。どのような意見があったのかというと、地域経済、文化芸術を学生たちが実際に活動し、その中で自らの知識を深めたり、新たな経験が得られたりする機会になってほしい。いろいろな人たちと情報交換し、活動を通して地域社会の魅力、問題課題を解決する経験をもってほしい。未来を担う若者たちが主体となる活動を活発にしたい、ということが実行委員の皆さんの想いとして伝わってきた。この部分では、クリエイトまち塾の取組と似ていると思っている。

これまでの間、いろいろなアーティストの方たちに、ポスターを作ってもらった。これを見ると、統一性がないといわれるかも知れないが、若い世代の人たちが実行委員に

なっているので、市の職員が邪魔をすることは避けてきた。若い人たちは、今年はこういうテーマでやりたいなど、常に新しいものを求めているので、毎回ビジュアルが変わるのだが、市としてはあまり出しゃばりすぎないように気を付けて、事務局を務めている状況である。

こちらが２回目の A-Paradise の活動状況の様子（写真を提示）である。駅前にあるねぶたの家ワラッセと A-Factory の間に広場みたいなところがあるのだが、そこにもステージを組み、パサージュ広場、駅前公園の三か所で、音楽イベントやライブペイントをやって、点を面に広げて、よりまちづくりに関与できるような、回遊性を高めるような取組をさせていただいた。この２年目から A-Paradise のテーマソングをエイイチロウさんに作っていただいて、幼稚園児の子供たちに振り付きで踊ってもらい、より幅広い世代、ファミリー層も参加して楽しんでもらえるようなイベントにした。

３回目のイベントは、さらに改良して、ワラッセ西の広場、駅前公園、ブラックボックスを加えて、ワラッセの中で演劇祭を開催したり、平安閣市民ホールギャラリーでワークショップを行ったり、What your “A” ということで、あなたの A は何ですかというのを商店主や一般の人に問いかけて、それを黒板に書いてもらったものを写真に写して、イベントの会場に展示するというようなことを行った。あなたが大切にしているものとか、最初に思いつくもの、心の一番先にあるものは何ですかということを問いかけて、これを大切にしている人が青森にいるということを知ってもらう写真展を開催した。

■事例発表者③

青森でアートや音楽に興味があって表現している人はたくさんいる。しかし、お互いにその存在に気づいていない人が、まだまだたくさんいることに気づかされた。青森にはこんな魅力的な場所があったのだということを、発表させてもらう中で感じた。私は青森戸山高校美術科の１回生なのだが、美術で青森に留まりながらもアート活動を続けている人は後輩にもたくさんいる。そういう人とのつながりで、一緒になって一つのイベントを創り上げ、盛り上げていく力が音楽やアートにはあると思っている。テーマソングや実際のイベントに力を貸せるような機会をいただいている。それを通して道行く人がぼくらのように活動している人を知らなかった人が、こういう人が青森にはいるのだということを分かってもらえるということが、やればやるほど実感が湧いてくる。地域のつながりというか、表現活動でまちを盛り上げるというのはすごく大切なことではないかと感じるようになった。今、コアメンバーとして関わらせていただいている。

■事例発表者②

このように、エイイチロウさんのような方の想いというものが、A-Paradise のテーマソングとして作られている。エイイチロウさんの作詞作曲なのだが、ぜひ皆さんにも聞いていただきたい。準備が整うまで補足説明をしたい。

３年間少しずつ積み重ねてきた。やはりまだまだ足りないと感じるところがたくさんある。実行委員会の若者にとって、社会教育の人材育成の場としての A-Paradise にしたいと考えたのだが、イベントを開催することに重きを置いてしまって、参加してくれた学生たちのフォローということに、十分手をかけられなかったのではないかと感じている。A-Paradise が人材育成プログラムとか、まちづくりプログラムとなっていない。やって終わってまた次の年という形になっているので、継続して活動していく必要がある。イベントが終わった後も、参加した人たちが集まってくれるような拠点というものが必要だと考えている。時間が空いた時にまちづくりに関われるようなところが必要だ。自分たちだけはまちの中でやっているからまちづくりになっているというのは、違うと

考えている。もっと商店街の人と交流を深めていかないとまちづくりの相乗効果が生まれないといったことが、３年間の反省として出てきた。今年は重点的にまちづくり関係者、人との関係を強化していこうと先進地視察やアーティストとの意見交換、ワークショップなど人材育成に心掛けてきた。ただイベントに参加して何か学んでねということではなく、こういうことを学んでほしいから、こういうワークショップをやるということをきちんと学生たちに説明する場を作るようにした。３回目は会場を増やして、手伝ってくれる人も多く集めたのだが、そうするとコアメンバーである実行委員の負担が大きくなりすぎてしまった。自分たちで計画したイベントを、運営のために見ることができなかったと、何をやっていたのか分からなかったといった意見があり、やり遂げた達成感はあるけれど楽しめなかったというのが、去年の反省として出された。そこで、もう一度原点に立ち返って、自分たちの手の届くところで、やりたいことをやろうよということになった。今年はブラックボックスの一箇所の規模なのだが、みんなでやりたいことをしっかり作って、やって楽しくて、やりがいのあるイベントにしようということで、それを重点内容として取り組んできた。それから A-Paradise が、他のイベントと何が違うのかを明確にするために、出演する人たちには公募制にして、「青森市とわたし」というタイトルで、４００字の原稿を書いてもらった。それを精査して、出演者を決めようということにした。ただ単に音楽をやるからいいではなく、音楽を通して青森市にどう関わっていきたいのかをきちんとやろうということで、１１月１８日の本番を迎えることになっている。

最後これだけは絶対に言っておこうと思ったことがあるのだが、ワークショップの一つとして、八戸のＮＰＯ団体まち組の視察をさせていただいた。県教育委員会生涯学習課の事業である平成２９年度若者社会参加促進事業の若者の拠点づくり支援を活用させていただいて、講師のまち組組長のＹさんの謝金を負担していただいて何とか実現できた。ご協力いただいたことに感謝申し上げたい。

■事例発表者③

（A-Paradise のテーマソング披露）

作詞・作曲　エイイチロウ

Ａで始める赤りんご
Ａで広がる青い海
Ａでときめく熱い夏
Ａで深まる青い森

それらが集まって 重なっていく街
僕らは味わって高鳴って
楽園は交わって高まっていくから
みんなのＡを今持ち寄って

エーパラダイス！
この楽園は君のピースが必要なのさ
エーパラダイス！
僕らの街はＡで始まりＩで終わるの
つまり青森 愛のあいだに

Ａで甘めのリンゴ飴

Ａで赤めくあの娘の頬
ＡはＡでも十人十色
Ａで始まる明日がある

それらで高鳴って重ねたその手に
ファンファーレ 轟いて驚いて
楽園はつながって拡がっていくから
みんなのＡを今はめこんで

エーパラダイス！
この楽園は君のピースで出来上がるのさ
エーパラダイス！
僕らの街はＡで始まりＩに終わるの
つまり青森 愛のあいだに

エーパラダイス！
ねぶた祭りで騒ぐ血潮 その魂が
エーパラダイス！
僕らの街はＡで始まりＩで繋ぐの
ほらね ここから会いに行こうよ

◆会長
　ここまで事例を二つご紹介いただいたので、委員の皆さんから質問や意見をいただきながら議論していきたい。

◇委員
　クリエイトに質問したい。高校生のグループ活動として１年かけて、企画提案してまちづくりを行うという説明だったのだが、この後、この参加した高校生はどうしているのかと、どのように高校生を集めているのかをお聞きしたい。

■事例発表者①
　高校生は、基本的には年度の初めに募集をかけて、３月で区切りという形にしているので、毎年参加していた高校生も含め、改めて募集している。応募に当たっては、保護者の同意を得てもらったりとか、参加者調書として作文を書いてもらったりしている。基本的に落とすことはないのだが、一応意思確認やモチベーションを確かめたいのと、ふるいをかけるという意味でも文章を書いてもらっている。企画提案で出してもらったアイディアについては、基本的に実現可能なものを出してもらうのだが、その中でも可能性が高いものに関しては、翌年度、高校生が実現に向けてプロジェクトとして取り組んでもらっている。
　人の集め方に関しては、基本的にはポスターを掲示している。ポスターは県立高校や私立高校、商店街に掲示してもらっている。また、口コミで集めたりしている。

◇委員
　メンバーは学生がメインだと思うが、高校生は部活やバイトで忙しいというイメージがあるのだが、それでもここに参加するのか。A-Paradise の実行委員の中に学生や様々な職業の方が含まれているということだが、詳しく教えていただきたい。

■事例発表者①
　メンバーの構成に関しては、まち塾の参加者が高校生２３名、それを運営する事務局は、地元の大学生と一部若手の社会人、といっても一番年上が私なのだが、２４歳以下の事務局員１３名が一体となって活動している。高校生の参加者の中には、部活に入っている生徒も比較的多くて、本当に忙しい部活に入っている生徒はあまりいないのだが、文化部や運動部に入っている生徒がいる。アルバイトしている生徒もいる。

■事例発表者②
　A-Paradise では、今現在は規模が小さくなったというのがあり、学生には当日のサポートや出演者として来ていただくというのが主である。昨年度の状況でいうと、県立保健大学の吹奏楽部の学生や青森高校のダンスサークルの生徒に出演者として来ていただいた。月に２、３回ある会議には、学生が３，４人参加している。それ以外は社会人が多くて、実際に自分たちで音楽や演劇をやってきた人が参加している。その方たちの職業でいうと、大学の職員、ビジネス機器の営業マン、ポスターのデザインを担当してくれたフリーのデザイナー、フリーのカメラマン、施設の事務員など、幅広い職種の方に参加いただいている。自分たちでアートや音楽に携わってきたことのある人たちなので、自分たちの若い時にはこういうイベントがなかったから、若い人たちにこういう場所を作ってあげたいという気持ちで、みなさん責任感をもって活動してもらっている。大学生は、夜の時間にバイトしていたり、テスト期間中になると参加できなかったり、定期的に１年を通じて参加していただくのが難しくて、むしろイベントの時であれば、バイト休みとって出られますという学生が多いのが現状である。

◇委員
　クリエイトまち塾では、９年目を迎えるということなのだが、その当時の高校生は大人になったり、大学生になったりしていると思うが、その人たちは、まち塾に参加したことで、どのような変化が見られているか。

■事例発表者①
　クリエイトを立ち上げたのが 2009 年なので、９年目になる。その当時の高校生は、地元の大学に進学したり、県外の大学を卒業後、県内の民間の鉄道会社や県職員になったりしている。最近の高校生も卒業後、県内外を問わず地域づくりを学べるような大学に進学したり、県職員になったり、何故か県職員になる人が多い。この４月にも更に２人就職するのだが、地元に帰ってくる人が多い。中には東京に就職した人もいるのだが、クリエイトの活動や商店街のイベントには、戻ってきてくれる。

◇委員
　クリエイトまち塾には毎年新しい高校生がいろいろな考えをもって集まってくるかと思うのだが、高校生と商店街の方をつなげていく中でここは気に留めていたこととか、ここは大変だったこととか教えていただきたい。

A-Paradise では、今までやってきたことを振り返ってこういう課題があって、こういうことを目指していきたいというものが伝わってきて、実際に参加している方の話とかが窺えて素晴らしいなと感じた。エイイチロウさんはアーティストの立場とコーディネーターの立場で活動に参加しているが、課題として感じていることや今後このように変えていきたいとか実感していることがあれば教えていただきたい。

■事例発表者①

まち塾に参加している高校生と商店街の店主をつなげる上で気を付けていることは、クラス編成のときに、３年間違う担任にするということである。３年間続けて参加している生徒でも、基本的には１年間ごとに担任を変えるように配慮している。それは、やはりつながりを広げるという目的があるからである。

まち塾というのは学校ではなく社会で行う活動なので、一つの学校だけで固まらないように、ばらけるようにクラス編成を行っている。参加にあたっての調書や志望動機というのを担任と副担任が共有していて、その子が何をしたいのか、どのようなことを思っているのかを理解してもらっている。参加している高校生と話す機会を年２回設けて、今どんな感じか悩みや活動する上での懸念がないか、その先どうすればいいのか相談に乗るような機会を設けている。

折角参加してもらっているので、年度途中でドロップアウトしないように、気を遣っている。そこが、大変なところである。今年は２３人の高校生がいるが、高校３年生のメンバーが５名いて、６月や７月になると活動を一旦休止する。そうするとクラスの人数が減ってしまい、いろんな活動であったり、企画提案を考えるのも大変になったり、そういう部分で大変なことがある。それから、まち塾という仕組み自体、中身を充実させようとすればするほど、ボランティアでやるには難しい部分がある。私は立ち上げ時から理事長としてやっているが、次に託していけるように仕組みを作っていかなければならないし、工夫はしているつもりである。リスク管理もあって、私が高校生で立ち上げたときは、けがをしても自分が立ち上げた活動だから、あまり問題にはならなかったのだが、今は高校生を預かる立場になるので、若干リスクを予見して、難しいと感じることがある。

■事例発表者③

今まで A-Paradise は、青森の駅前一帯で同時多発的にいろいろな企画をやってきた。例えば、ワラッセの西の広場で、音楽とかパフォーマンスの人がたくさん出るステージ、同時進行でワラッセの中では県外からたくさんの劇団を招いて、いろいろなお芝居が上演されるイベントをやってきた。様々なイベントが街のあちらこちらで行われていて、全体としては楽しいイベントになったのかもしれないが、何か楽しいことをするということでは、青森の中のお客さんを取り合っているだけで、A-Paradise という大きなイベント創り上げたという実感があまり少ないのではないかという反省点も出されていた。より一体になってやれているという実感が湧けないことには、これからの A-Paradise にならないのではないかということが私の実感したことである。

今考えているのは、A-Paradise のメンバーで、青森で魅力的な活動している人をつなぐ新しい活動である。バンドと演劇をする人をコラボさせるとか、A-Paradise 独自のブランディングというか、個の団体が発表するだけではなくて、人と人とをつなげて青森にしかない表現を生み出す、そういうつなぐきっかけになっていければいいのではないかと考えている。

もう一つは、市内で元々活動している団体と積極的につながることである。最近、

“あおもりコーヒーフェスティバル”というイベントがあったのだが、使えなくなってしまったコーヒー豆を使ったマラカス作り、子どもが楽しめるようなイベントブースを出した。このように、元からあるイベントにブースを出展して、アートと音楽で他のイベントとミックスしていけるか、一緒に盛り上げていけるかというところを A-Paradise のブースト役としてやっていければいいのではないかとやり始めている段階である。ただのイベントだけではなくて、もっと人と人をつないでいく接着剤みたいな役割を担っていければいいと考えている。

◇委員
　青森らしさというか、青森ならではの素材というか、こういうところが青森っていいなあと考えているところを教えていただきたい。

■事例発表者②
　青森の人は、やる気を表に出したりはしないが、いざ自分でやると言ったら、“頑固”とか“じょっぱり”という言葉になるのかもしれないが、責任感を持ってやってくれる。一昨日に A-Paradise の会議があったときに、部会長の県立保健大学の事務のＴさんに、毎週夜７時から９時までの会議にどうして毎回参加してくれるのか尋ねたことがあるのだが、Ｔさんは「面白いことが好きなのもあるのだが、一度引き受けたからにはきちんとやりたいから」と答えてくれた。いい点は責任感があるところだと思う。ただ、そこから枠組みを飛び出して、もっと面白いことをやっていこうとするエネルギーみたいなものは、他の県と比べたことはないが、もう少しほしいと感じている。もっと馬鹿な事をやってもいいと思うことがある。もしかしたら、今関わっている人たちの性格的なものかもしれないが、自分の私見だとそんな感じである。

■事例発表者①
　青森はどうしてもネガティブなイメージがあり、青森ってどうと聞くとネガティブな言葉が返ってくることが多い。その中で青森らしさって何だろうと考えると、やはり人だと思う。最初は距離を置いているのだが、まち塾とか新しい取組に対してこちらから声を掛けていくと、熱烈に応援してくれるようになる。内にすごく熱いものを秘めていたりとか、協力してくれたりとか応援してくれたり、そういう人というのが青森らしさなのかなと感じている。

■事例発表者③
　私もネガティブな印象として、正直なところ青森って足を引っ張り合うという気質があるように思う。それはどんなシーンでもそうなのだが、ちょっとしたところで派閥ができてしまったりする。でも、それはちょっとしたきっかけがあれば壊していけるもの、みんなが向かっているところは一緒である。青森を何とかしたいと危機感を感じている若者はたくさんいると思う。歌詞の中に、「ねぶた祭りで騒ぐ血潮、それが A-Paradise」という詩があって、内に秘めたるものが起爆剤となって、パワーがある表現者の方がたくさんいる。それを結びつけるきっかけさえあれば、どこにも負けないパワーになるのではないかと考えている。A-Paradise も多ジャンルになるが、お芝居でも絵を描く人でも歌を歌う人でも、独特のディープなシーンがあって、そこを結びつけたいという気持ちを強く持っている。

○事務局
　クリエイトも A-Paradise も集まってくる若者というのは、元気のいい若者だと思う。一方で元気のない若者、例えば、高校生であれば高校に行けないで困っている、悩んでいる若者や、あるいは、引きこもってしまっている若者がいる。県としても昨年度からそのような若者たちを対象とした事業を行っているのだが、そういう若者たちも参加しているのか、今後のことも含めてお聞きしたい。

■事例発表者①
　クリエイトまち塾では、過去には不登校気味だった生徒が参加してくれたこともあった。不登校かどうか確認したことはないが、話を聞くところによれば不登校ぎみだったという生徒がいた。高校生世代に引きこもってしまう若者は、学校の中で存在感を示しにくい人たちだと思うのだが、だからこそ、社会教育というか、地域というフィールドで活動することで、そこが居場所になる場所や存在感を示せる場所になるかもしれないと思っている。まち塾としては、そういう若者たちに来てほしいと思っているが、そこに来てもらうためにはステップを踏んでもらわないといけないので、そこは仕組みづくりの中で課題だと感じる。

■事例発表者②
　A-Paradise に関しても、そういう若者たちの支援や社会参加をメインとしているわけではないので、積極的に参加してくださいという働きかけを今までしたことはない。ただ、アートや音楽というのは、確かにそういう若者たちの受け皿に成り得ると思う。実際に昨年の実行委員の中に、自己紹介でコミュニケーションが苦手だと話す２０歳ぐらいの女性の方がいた。その方とは上手くコミュニケーションもとれて、こちらから強制的にこういうことをやってということもなかった。できることだけ参加してくださいと伝えたら、当日ブースを設けて、ずっと絵を描いてくれたり、自分の作った作品を販売してくれたりした。今、参加してくれている方の中では、知的障害と障害者手帳を持っていて、過去にリストカットの経験があるという方も、積極的に参加してもらっている。今年は、ブラックボックスの中でその女性が描いたアートを展示する予定である。まだ、自分たちの中では、そこまで手を伸ばすところまではいっていないが、今後の可能性として、実際に障害を持った方で絵を描いているとか、障害者施設の中でアートを作っているところとかあるので、そういったところと連携してやっていくということも面白いかなと過去に障害者支援課というところに身を置いていた私としては、そういうことができればここに来た意味があるのかなと今感じているところである。

■事例発表者③
　私も、学校の中では上手くいかない関係性になった生徒でも、学校とか関係ないと考えている。さくら野百貨店の前で歌ったりするのだが、そういう中で出会った方と深い結びつきができたりとか、そういう表現の楽しさを知っていなかったら、大人になってから仲良くなれた人がどれだけいたのだろうとか考えると、もし、引き籠りがちな若者がアートや音楽に興味があって、こういうことを表現してみたいのだときっかけの種をもっているのだったら、そのきっかけを提供することが A-Paradise ではないかと思う。そういう力になれるようなきっかけづくりができるのであれば、みんなで引っ張っていきたいと思う。そういう場をつくれるような活動に慣れるのではないかと思う。

◆会長
　この会議は県の今後の生涯学習の方針を示すものなので、その観点から二つ質問したい。一つは、こういう活動するためには県はどういうことをすればいいかである。県は直接前面に出ることはない。青森県全体として若者に対する取り組みを促進し、支援していくためにどんなことができるのか、または、してほしいのか伺いたい。もう一つは、二つの団体は青森市という、県の中ではそれなりに人が集まっている地域で活動されている。同じような取組を町村でもできると思うか、町村部で行うとすればどこが違うのかを伺いたい。現在の活動から答えが直接導き出せるものではないかもしれないが、何かヒントをいただきたい。

■事例発表者①
　まず、県の支援に関しては、後方支援が望ましい。自分たちの活動で考えれば、まち塾の取組はボランタリーなので、ついつい回すので精一杯になってしまって、それを本来であれば、社会に広く発信していければいいのだが、そこまで回らない現状がある。こういった取り組みがあるということを広く発信してもらえると有難い。まち塾は、ここ最近、県立や私立の高校とつながりを作ろうと思っているところで、どうしても学校に民間の団体が入っていくのは難しい面がある。そこでも県としてきっかけをいただきたい。
　町村部での実現可能性としては、クリエイトまち塾は昨年度、岩手県花巻市でも地元の高校生に、花巻の学生団体が主体となってイーハトーブまち塾という取組を行った。花巻は人口が 10 万人程度だったと思うが、そのくらいの規模で実際に回すことができたので、他の市町村でもできるという実績がある。そう考えると、まち塾というのは商店街をフィールドにした活動になるのだが、なぜ商店街かというと、丁度良いスケール感であり、地元を知る上にも丁度良い資源であるからである。商店街というのはイメージしやすい場所であるし、コミュニティとしても分かりやすい。そういう意味でも町村部でも実現可能なのではないかと考えている。ただ、町村部では商店街の機能そのものが失われてしまっている場所もあるので、その場合はどこをフィールドにするかということを検討しなければならない。できなくはないと思っている。

■事例発表者③
　広報の面で、A-Paradise の活動をもっと広く知ってもらうことが必要だと考えている。そういう面で力を貸していただきたい。自分たちでも SNS とかで発信してはいるが、そういうものに目を触れない方や学校もそうなのだが、広く知ってもらえるような広報の支援をいただきたい。
　アートや音楽、雑貨を作るでもいいのだが、何か創造しようと考えている方と結びついていくことが、A-Paradise に必要なことだと考えている。そういう人材を、イベントを手伝えますという人材でもいいし、そういう人のつながりを今集めたいと考えている。そのような人材を紹介していただけるのであれば、そういった人たちとつながっていきたい。
　町村部でやれるかということだが、原動力になるのは何か楽しいことをしようということなので、核になる人がいればできるのではないかと考える。例えば、A-Paradise では、新町の元のマクドナルドの店舗を使って、アート作品の展示をしている。青森戸山高校の美術家の後輩の女性が、幼稚園児の小さい子供にワークショップを通して絵を描いて展示したり、県外で活躍しているアーティストを招いてアートを展示してもらった

りしている。アートに触れてもらうきっかけをつくりさえすれば、そこに興味が芽生えてやる人が増えていき、そこに人が集まると思う。最近、青森県内で音楽でまち興ししようとか、そういったイベントが結構立ち上がってきている。最近では 10 月初旬の週末に五所川原市で“やってまれフェスティバル”という、県外からアーティスト達が集結して、音楽の祭典を開催された。そういったことの呼びかけをする中核を担ってくれる人が地域に一人でもいれば、そこからつながりが生まれてくるのではないかと思う。こういうことに興味があって、町村部でもやってみないかと声かければ、手を挙げる人がいると思うので、きっかけづくりが必要だと思う。そこのまちに生まれ、何かやりたいと思っている中核になる人がいれば、どんどんつなげてやっていける可能性というのはあるのかなと思う。

■事例発表者②

二人の話を聞いて、二つあると思う。一つは、取組事例を県内に水平展開していくことは県でないとできないということ。もう一つは、町村部もそうなのだが、行政が主体となってやると、すごく手間がかかったりするので、むしろ、地域に根差している公民館のようなところが、クリエイトまち塾みたいなものを一講座としてやってみたり、公民館のイベントとしてアートや音楽を取り入れてみたりといったような小さい成功を少しずつ積み重ねるところからやっていくこと。そうすれば、規模とかあまり考えなければ、町村部でも全然できないことはないと考える。学校でやってみるというのも一つの手なのかなと思う。

◇委員

予算面をお伺いしたい。活動資金だがどの辺りから資金を調達しているのかと、これまでの話と関連すると思うのだが、事例発表者の二人のような若者やＩさんのような職員をどう育てていけばいいのか、非常に大事になってくると思う。二人は自分のような若者が育つには、どうすればいいと考えるのかお伺いしたい。

■事例発表者①

まず資金面に関してだが、まち塾は年間予算 80 万円である。まち塾の会場費であったり、講師謝金であったりとか、担任にも年間で 1,2 万円だが謝金を支払っている。引き受けてもらっている時間は店を閉めてもらって、飲食店であれば営業補償もしなければならないが、それはできないので謝金という形で対応している。その 80 万円の予算は現状多い順で言うと補助金である。今年度は競輪の補助を受けている。もう一つは、参加者の保護者から参加費をいただいている。それが年額１万５千円である。取組の趣旨を理解いただいて、１年間しっかりとまちとのつながりをつくり、参加者自身の能力向上にもつながるのだということを理解いただいて参加費をいただいている。予算に関しては、クリエイトの立ち上げ以来、目標としているのは立ち上げから 10 年を目途に補助金をなくそうと話してきたので、それが再来年の 2019 年になる。その前後で補助金は無くしたいと考えている。そのためには予算をできるだけ削減し、かつ、参加費もこれからどうしていけばいいか、あるいは、保護者からいただくのではなく、広く地域に負担していただく、それは企業協賛といったやり方も必要なのではないかと思っている。企業協賛に関しては、ボランティアの中で割ける時間としては厳しいとも考えている。そこは、みんなで検討しているところである。

人づくりに関しては、自分が高校時代に商店街の人たちに怒られたり、褒められたりした経験が、今活動する中で有難かったと思っているし、それが地元に帰ってきたいと

いう想いになってまち塾の立ち上げになっている。地域に愛着を持つ人材を育て行くためには、最後には人だと思っている。地域の人とどれだけ密に過ごせるかどうかにかかってくると思っているので、そういう意味でまち塾のような仕組みや似たような取組を通して、地域の異世代、同世代ではなくて、ちょっと上、あるいはもっと上の世代の人たちと深いかかわりを作るということが地域愛着や地域を担う人材の育成に資するのではないかと思っている。

■事例発表者②

予算面の話をさせていただくと、今年度は前年度に比べてガクッと減ったにも拘らず 200 万円程度の予算がある。半分は市の負担、もう半分は国の文化庁の補助金で、若い人たちが文化とかに根付いて地域の文化継承を担っていくという内容で、合わせて 200 万円になっている。その他は協賛金である。昨年は 20 万円ほどだが、今年度は集めても予算が潤沢にあるし、会場が狭まったので、そんなに使わなくてもいいのではないかということで協賛金はどうしようか話し合っているところである。

■事例発表者③

正直な話、私は学生時代に特段運動ができたわけでもないし、勉強がすごく得意だったということもなかった。唯一絵を描くことや音楽にすごく興味があった。だから、一つ何か興味があることを突き詰めてやれることが見つかることで、道が開けると思う。結局、私は音楽という道を選択したのだが、好きでずっと路上で歌っているうちに仲間も自然と集まっていたし、類は友を呼ぶではないが、青森に居ながらにしてもプロ意識をもって活動している人がたくさんいることが分かった。それが、東北県内でもいる。今では、東北が狭く感じるくらい、互いに行き来するような音楽仲間もできた。だから、学校で評価されにくかった部門に興味を持っている若者を引っ張り上げるのが、正に A-Paradise の役割だろうと考えている。青森でも好きなことをやっていていいという気持ちを持ってほしい。昔は青森から東京へ出ていったが、青森でも面白い人がいるということと、やっていてもいいということと、暇はしないということを分かってもらいたい。青森はいろいろ厳しいけれど、出たくない、仲間と離れたくないという想いになると思う。学校だけの狭いコミュニティではなくて、外の世界、自分の好きなことに同じくらい好きに思っている人がたくさんいるということを分かるきっかけさえあれば熱中しているのではないかと思う。

◆会長

興味深い事例報告と質疑応答ができたが、さすがにそろそろ終わらなければならない。これで案件(1)は終了し、５分だけ休憩を取りたいと思う。今日事例報告をいただいた三人の方に感謝の意を込めて拍手を送りたい。

（休憩）

案件（２）先進事例実地調査について

◆会長

それでは、後半は案件として二つが予定されている。一つは先進事例実地調査に関わる調査項目についてと今後のスケジュールについてである。まず、先進事例調査に関わる調査項目について事務局から説明をお願いしたい。

〇事務局

（資料３「先進事例実地調査について」の説明）

◆会長

私が新城市を担当する。新城市は、条例を制定し、それに基づいて予算をつけ、若者の意見表明の場として議会を設置するという、制度として体系的に行っている点に特徴がある。それがなぜできているのか、どのような効果をあげているかを確認したい。

それに対してシブヤ大学は、若い人たちが若い人たち自身の教育の場を提供するという形である。特に運営面、参加者や講師、スタッフをどういう形で持続的にリクルートしているのかが大事になってくると思われる。また、渋谷と青森では地域性がかなり異なるが、シブヤ大学方式は地方都市でも行われているようなので、渋谷でやる場合と地方都市でやる場合、もっと人口の少ない都市でやるとしたらどういうやり方があるのかというアイディアを聞いてきてもらいたい。

気仙沼と石巻の団体に関しては、震災という特殊事情から課題が一気に噴出した地域で活動している。とはいえ、こうした地域課題は、青森とも多かれ少なかれ共通している思われる。取り組み内容などはダイレクトに参考になるのではないか。

先進事例実地調査に行かれた委員にはレポートを提出していただくことになっているそうなので、そのまま最終報告書にも載せたいと思う。行かれる方は大変だと思うが、いろいろ見ていただきたい。レポートに関しては、次の審議会といわず、できたら早めに委員のみなさんと共有したいと思う。遅くても１月頃までには出そろう予定となっているが、早く行った人は早く提出していただきたい。これに関して何か意見があればお願いしたい。

◇委員

シブヤ大学に行くが、自分としてはホームページとかを見ていても規模が全く違うと感じている。前回の審議会ではだからこそ視察したいとお話ししたが、どれだけ違うのかを体験しながら、それでも、違うところから共通点が必ずあると思っているのと、全然違うのにここでできるという視点があると思うので、意義のある調査にしたいと思っている。しっかり勉強して、いい報告ができればと考えている。

◇委員

訪問しなければならない団体が多いので、混乱しないように整理して報告したいと思う。

◇委員

それぞれ成り立ちや今の状況や置かれている立場とか違うと思うので、それぞれ抱えている課題とかを共有できるように報告できればと考えている。

◇委員
　今回の調査先は、愛知県、宮城県石巻と気仙沼、シブヤ大学は渋谷だが、もしかして青森県人がいたら、インタビューしてきてもらえたらと思う。どういうメンバーが活動しているのか興味があるところで、その中に青森県人がいたら、ぜひ聞いてきていただきたい。そういう若者がいたら大変うれしく思う。

案件（３）今後のスケジュールについて

◆柏谷会長
　それでは、案件４の今後のスケジュールについて事務局から説明をお願いする。

〇事務局
　（資料４「今後のスケジュールについて」の説明）

◆会長
　このことについては、今後このような流れになるということでご理解いただきたい。今まで我々は議論を発散的にしてきたわけだが、こういうこともあるし、ああいうこともあるというアイディアを出してきて、これはこれで非常に楽しかったのだが、今度はこれをまとめる作業に入ってくることになる。事務局には原案作成をよろしくお願いしたい。それから、皆さんには県全体としての取組の方向性を意識しながら意見を頂戴したいと思う。何かこれに関して意見があったら、お願いしたい。

（特になし）

◆会長
　それでは、案件についてはこれで終了ということになる。当面に関しては、実地調査に行かれる委員の皆さんは、有意義な調査をしていただきたい。それでは、事務局にお返しする。

４　その他

（特になし）

５　課長あいさつ